

『一人の笑顔のために』

3月3日

今年は、卒業証書授与式の前日となった3月3日。多くの人が「ひな祭り」を思い浮かべるとは思いますが、全国水平社創立記念日でもあります。ちょうど100年前の1922年3月3日、『人の世に熟あれ 人間に光あれ』で知られる水平社宣言が読み上げられ、水平社が誕生しました。

差別のはじまりは、本当のことを「知らない」ことにあります。

よって、わたしたちは学習することによって、本当のことを知ることが必要です。そうすることによって今まで見えなかった差別がだんだん見えるようになってきます。

(読売新聞の『窓』という欄に投稿された手紙です。)

窓さん、今日はとてもつらいですよ。わたしの住んでいる所も結婚はもちろん、職場でも目には見えない差別があると聞きます。私は幸か不幸か差別とはっきりわかるような待遇を受けたことはありませんが、何年前、長男の友人の誕生会がありました。仲良し五人組。他の四人は招待されたのに自分だけ声がかからず「お母さんが、いいっていったら」ということでした。でもやっと母親の許可がおり自分も行けるとわかった時の嬉しそうな顔。さっそくプレゼントをもっていそいそと出かけたものでした。「今度は僕の誕生日にみんなきてもらうんだ」と。その日、お赤飯に子どもたちの好きなお子様ランチにケーキ。でも誰一人として「おめでとう」とは言いに来てくれなかったのです。すぐ電話したところ「お母さんが行ったらあかんやて」と寂しくこたえていました……。お子様ランチに飾りに付いている小さな旗、楊枝に小さく切った半紙をのりづけして色をぬる、親子でその日のためにいっしょに作ったのに……。

だれも食べに来てくれなかったお子様ランチ。その夜、坊やがどんな気持ちだったかと思うとたまらない気持ちになります。

部落差別は、そっとしておけば自然になくなる、だから、いまさら知らない人にまで同和問題を教える必要はないという考え方があります。しかし、大人が同和問題について間違った考え方を子どもに教えると、疑いもなくそれを正しいと思いこみ、その子どもが大人になって、また、次の世代の子どもに伝えるというように、差別がいつまでもなくなることはないことになるのです。

私たちは、次の世代に同和問題についての偏見や誤った考え方を引き継がないよう、一人ひとりが同和問題に対する正しい理解と認識を深めるよう努め、家庭や職場、学校、地域あらゆる場を通じて差別をなくす行動を起こしていく必要があります。

(同じお母さんから『窓』に寄せられた別の手紙です。)

今日は長男のことを少し書かせてください。先月から新聞配達をするようになりました。自分で引き受けてきたのです。わずか十五軒ほどですが、今のところ自分で引き受けたのだから自分の責任だと一度も起こさずに自分から起きて早朝の中を自転車を出かけていきます。

今、彼の一番の悩みは雨降りです。雨が降ると新聞がぬれます。肩からかける防水用の袋がほしいのです。もしそんな袋をおもちでしたらお願いします。

先日彼が初めて給料をもらいました。二千七百円です。そのうち七百円は自分、残りは母さんにあげると言います。うれしくてとても使う気にはなれず、タンスの中にしまっています。そして七百円は、と聞くと、困っている人たちに五百円寄付するんだと言います。夜、三人の子どもたちの寝顔を見ながらこのまま大きくなってほしいと願わずにはいられません。(参考:「開け心が窓ならば」 解放出版社)

間違っただけの見方や考え方によって、一生懸命に生きている人々(子どもたち)を傷つけてしまうことが絶対ないように、わたしたち一人ひとりが真実を知る(正しい認識を持つ)ことが大切です。差別をされる人がいるから差別があるのではありません。差別をする人がいるから差別があるのです。差別をなくしていくのは私たち一人ひとりです。